



〒663-8558 西宮市池開町6-46

武庫川女子大学言語文化研究所

TEL 0798(45)3536

FAX 0798(45)3574

<http://www.mukogawa-u.ac.jp/~ILC>

「強い絆」から「深める絆」へ コロケーションのゆれ

近年、テレビや新聞などのマス・メディアを始めとして、催し物や公的な行事のテーマなどでも「絆」ということばをよく見聞します。また、2011年の「今年の漢字」^①にも「絆」が選ばれました。そういった点から見ても、「絆」は多くの人に注目されていることばだと言えるでしょう。

その「絆」がどのような使われ方をしているかが今回のテーマです。

「絆」は、国語辞典^②では、「馬・犬・たか等をつなぎとめる綱。転じて、断とうにも断ち切れない人の結びつき。ほだし。」と説明されている通り、もともと「綱」を意味します。ですから、「強い」と結びつく「強い絆」という言い方があります。「しっかりとした強い綱」をイメージした表現です。他方、「深い」と結びつく「深い絆」という言い方もよく使われています。

このように、「絆」は、「強」とも「深」とも結びついて使われています。つまり、「コロケーションのゆれ」があるのです。そうすると、ここで、「強い綱」はともかく、「深い綱」とはどのようなことかという疑問がわいてきます。

以下、「絆」と共起する「強」と「深」の用いられ方になんらかの違いがあるのかどうか、特徴的なことは何かについてレポートします。

1. データについて

- ・使用したデータ：「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)^③

サブコーパスは3種類（出版/図書館/特定目的）とも使用

- ・使用したコーパス検索アプリケーションソフト：「中納言」^④

- ・調整後のデータ数：648

（「中納言」の全検索結果941から、書籍タイトル、行事・催事テーマ、固有名詞などを削除した）

① 「公益財団法人日本漢字能力検定協会」が全国からその年の世相を表す漢字一字を募集している。

② 岩波国語辞典（第7版）

③ 「大学共同利用機関法人国立国語研究所」公開のデータベース。<http://www.ninjal.ac.jp/database/>

④ ③と同機関の検索ソフト。

2. 「絆」と結びつく形容詞・動詞

【表1】 結びつく形容詞・動詞

	形／動	前接	後接	「強」系	「深」系	計	%
強い	形	40	31	●		71	26.0
結ぶ	動	10	47			57	20.9
深める	動（他）	－	36		◎	36	13.2
深まる	動（自）	－	19		◎	19	7.0
強める	動（他）	－	16	●		16	5.9
深い	形	8	4		◎	12	4.4
固い	形	9	3			12	4.4
断ち切る	動	－	12			12	4.4
結びつける	動	11	－			11	4.0
強まる	動（自）	－	10	●		10	3.7
切れる	動	－	5			5	1.8
維持する	動	－	4			4	1.5
弱まる	動	2	－			2	0.7
たたき切る	動	－	1			1	0.4
切り離す	動	－	1			1	0.4
途切れる	動	－	1			1	0.4
保つ	動	－	1			1	0.4
細い	形	1	－			1	0.4
弱い	形	1	－			1	0.4
計		82	191	97	67	273	100.0

形：形容詞 動：動詞 （自）：自動詞 （他）：他動詞

「絆」と結びつく形容詞と動詞とを頻度順に示したのが【表1】である。最も多く結びつくのは「強い」で、次が「結ぶ」となっている。以下、「深める」「深まる」「強める」「深い」と続く。

また、それらの語の結びつく位置が「絆」の前か後かについても示した。形容詞では、「絆」に後接する場合もあるが、どちらかと言えば、「絆」の前に現れやすい傾向がある。反対に、動詞は、「結びつける」「弱まる」以外、「絆」に後接して使われている。また、結びつく語の多様さで言えば、形容詞より動詞の方が多種である。

さて、この表にあげた語のうち、「強い」「強める」「強まる」を「強」系とし、「深い」「深める」「深まる」を「深」系とすると、それぞれの出現数は「強」系97、「深」系67であり「強」系が多い。これらのことから「絆」が本来の「綱」のイメージをもって用いられる方が多いと言える。

ところが、動詞だけに注目してみると、「強」と「深」の結果が逆転する。

次の【表2】を見てみよう。

3. 「絆」と結びつく動詞

ここで注目するのは、「深」系の出現数である。「強」系の26に対して、2倍以上の55となっている。【表1】で示した通り、形容詞は「深い」(12)よりも「強い」(71)が圧倒的に多く結びつく。だが、動詞では、「強まる」「強める」よりも「深める」「深まる」の方が多く結びついている。

さらに、自動詞と他動詞とでその出現数に偏りがあることに気がつく。「深まる」(自19)よりも「深める」(他36)が多く、「強まる」(自10)よりも「強める」(他16)が多い。

「深」も「強」も他動詞の方

が多く使われている。つまり、動詞では、「絆」は、「強」系よりも「深」系と結びつきやすい傾向にある。そして、自他の別では、「強」・「深」とともに、自動詞よりも他動詞が多く用いられているということだ。

さて、「絆」と結びつく「強」と「深」について、ここまで見てきたことをいったんまとめると、大きく次の3つのことが言えそうだ。

- ①形容詞の場合 強 > 深
- ②動詞の場合 深 > 強
- ③自他の別 他動詞 > 自動詞

①については、先にも述べた通り、「絆」が従来の「綱」としての意味合いで使われている傾向にある結果だと考えられる。では、②と③についてはどうだろうか。なぜ、動詞の場合は「深」の方が多くなるのか。また、同じ動詞であっても、なぜ、自動詞よりも他動詞が多く出現するのか。

次頁の【表3】【表4】から、その理由の一端を探してみたい。

4. 「強」系と「深」系の経年出現状況 — 「強い」から「深める」へ

「強」系と「深」系の出現数を資料の刊行年別に表したのが次頁【表3】である。「強」系は、1991年以降コンスタントに出現している。一方、「深」系は、2001年以降に出現が目立ち始め、特に、他動詞「深める」は2005年(17)、2008年(10)と急増している。時代が進むにつれ、「深」系の台頭が認められるのだ。

さて、冒頭でも触れたように、「絆」の本来の意味は「綱」であった。だから、

【表2】 結びつく動詞

	前接	後接	「強」系	「深」系	計
結ぶ	10	47			57
深める (他)	—	36		◎	36
深まる (自)	—	19		◎	19
強める (他)	—	16	●		16
断ち切る	—	12			12
結びつける	11	—			11
強まる (自)	—	10	●		10
切れる	—	5			5
維持する	—	4			4
弱まる	2	—			2
たたき切る	—	1			1
切り離す	—	1			1
途切れる	—	1			1
保つ	—	1			1
計	23	153	26	55	176

(自)：自動詞 (他)：他動詞

【表3】 経年変化

	1991	1993	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2008
深める				1					1	1	5	3	16	9
深まる	1			1					1	3		3	5	5
深い									2	3	1	3	1	1
(深 計)	1	0	0	2	0	0	0	0	4	7	6	9	22	15
強める				1					2	3	5	2	2	1
強まる		1					1		4	1		3		
強い	6	3	2	4	1	3	3	3	4	5	9	8	11	4
(強 計)	6	4	2	5	1	3	4	3	10	9	14	13	13	5

「綱」の状態を表すという意味で、「強い」が「絆」とより結びつきやすいと考えられる。ところが、結果の通り、近年は「深」とも結びつきやすい。

そのことを顕著に示すもうひとつのデータを示そう。【表1】から【表3】までのデータは、2008年までの資料が元になっている。そこで、2009年以降の使用例も含める意味で、ウェブでの検索を行った。【表4】は、検索エンジンGoogleでフレーズ検索（指定した句の形に絞って検索）

【表4】 ウェブ検索

を行った結果を示したものだ。検索の結果、「絆を深める」の形で用いられる例が圧倒的に多く得られた。単純に考えれば、ここ5年ほどの間に「深」系が人々の間に一気に浸透したのである。

だが、「綱」を「深める」とは一体どういうことだろうか。それについて、次のように考える。

絆を深める	8,120,000	絆が強い	4,940,000
絆が深まる	2,220,000	絆を強める	1,120,000
絆が深い	1,830,000	強い絆	631,000
深い絆	351,000	絆が強まる	246,000
深まる絆	32,600	強まる絆	7,100
深める絆	3,820	強める絆	712
	12,557,420		6,944,812

Google 2013年10月17日午前11時 検索

「人と人との結びつき」に「絆」が使用される場合、そこでは、「綱」という「モノ」ではなく、より情緒的な意味合いが強く意識されるようになってきた。表面的な「つながり」ではなく、「心と心」とか「信頼し合う気持ち」を表現する場合の「絆」に対するイメージが、「モノ」から「モノではない」ものへと変化してきているのである。さらに言えば、「絆」が（勝手に）「深まる」（自動詞）のではなく、「絆」を（人間が意図して）「深める」（他動詞）ことが大切であり、必要だとする書き手の意識の表出が、他動詞が多用される結果になったのではないだろうか。

「深」の多さの背景には、「絆」のとらえ方が、従来の「綱」という“モノ”から、「つながり」重視の“ココロ”へと変化しつつあることが、大きな要因だと考えられる。

〔参考文献〕 田野村忠温（2012）「BCCWJに収められた新種の言語資料の特性についてーデータ重複の諸相とコーパス使用上の注意点ー」『待兼山論叢』第46号 大阪大学大学院文学研究科